
文化遺産教育プログラム

アンコール文化遺産教育と普及活動

Cultural Heritage Education for Communities

កម្មវិធីអប់រំបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌
អប់រំបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌សម្រាប់សហគមន៍

丸井雅子

上智大学総合グローバル学部教授

三輪 悟

上智大学アジア人材養成研究センター特任助教

1. 「文化遺産教育プログラム」実施の経緯

トンレ・サーブ（湖）西北岸に広がるシェムリアップ州の中でも、とくに北東部のプノム・クーレン（丘陵）一帯を水源としてこのトンレ・サーブへ流れ込む河川が形成した扇状地には、アンコール朝期の都城跡や寺院建築遺跡等が多く集中している。1992年にユネスコ世界文化遺産に登録されたアンコールは、その後1994年までに文化遺産保護のため全5ゾーンから成る保護区域が設定され、それぞれ保護基準の遵守が義務付けられた。よく知られるアンコール・ワットやアンコール・トム等は最も重要とされる保護地区である第1ゾーンに区分され、その周囲に緩衝地域として約400km²の第2ゾーンが広がる。その第1および第2ゾーン内には、91の遺跡と113の村があるⁱ。村には2012年時点で約13万人が生活しているⁱⁱ。以上が、現在のアンコール地域の様相だ。

上智大学アンコール遺跡国際調査団は1991年からカンボジアで人材養成プログラムを開始し、アンコール地域ではバンテアイ・クデイにおける考古学調査（1991年～）やアンコール・ワット西参道修復事業（1996年～）の実施に伴って若手専門家の育成に取り組んできた。この中で考古学調査の一つである発掘調査は、調査を開始した1990年代においては「宝探し」、「盗掘」と第三者から誤解されることもあり、調査の手続きや地元への情報公開等には慎重を要した。そうした経験の積み重ねを経て、遺跡および文化遺産についての普及教育活動として企画されたのが「発掘現場の現地説明会」で、第1回は1999年1月末にバンテアイ・クデイで実施した。調査団による人材養成事業の経緯や普及教育活動についてはすでに別稿で論じているので（丸井2000等）ⁱⁱⁱ、詳細は省略するが、1999年1月末時点での状況は、専門家ではない地域住民を対象とした発掘現場の現地説明会は皆無であった。調査団が現地説明会を企画した意図として、バンテアイ・クデイ発掘

調査の目的や判明したことを地域の人へ正確に伝える、という目的があった。またバンテアイ・クデイの考古学調査成果の情報伝達を通じて、地域の人に遺跡の歴史や現代における文化遺産保護についても知ってもらいたいという意図もあった。

バンテアイ・クデイではその後2000年から2001年にかけての発掘調査で、274点にのぼる石製仏像が出土し、内外で大きな話題となった。この仏像を収蔵、展示するための博物館がイオン(株)からの全面的な寄付を得て建設されたのが2007年11月のことであった。博物館開館後の2008年、遺跡の発掘現場に加えて出土資料が展示されている博物館も一緒に見学するプログラムが発足した。これまでの現地説明会から文化遺産を包括的に楽しむ会に発展し、より拡大した「文化遺産教育プログラム」の実施が押し進められた。

2. 「文化遺産教育プログラム」の原則

文化遺産普及教育活動の基本的な方針は、以下のとおりである（原則）。

- 1) 考古発掘を実際に見学しながらその歴史を学習する。
- 2) 考古・建築学専攻のカンボジア人学生が地域住民や小学生・中学校の生徒を引率し、遺跡の現場においてその歴史をカンボジア語で説明する。
- 3) 小学生・中学生だけでなく付き添いの学校教員にも遺跡現場への引率やアンコール王朝の歴史の説明の仕方を学んでもらう。
- 4) 文化遺産教育をカンボジア版校外学習としてカンボジアの教育カリキュラムへ根付かせることを目的としている。

3. アンコール文化遺産教育センター

日本国外務省「草の根文化無償」により2011年12月にバンテアイ・クデイ内に「文化遺産教育センター」が供与された。

ここバンテアイ・クデイにおいても、雨季あるいは乾季問わず、普及教育活動が実施できるようになった。

教材としてのパネルはカンボジア語、英語、日本語で掲示されている。このセンターでは、プログラムを運営する王立芸術大学大学生たちが村人や小・中学生へ紙芝居を通じて文化遺産保護の意味を説明したりする一方で、村人と大学生との対話の時間を設けて遺跡とともに生きてきた長老たちの体験や知恵を学んでいる。

ここ数年は、アプサラ機構も同機構が企画している文化遺産教育関連プログラムでこのセンターを活用しており、本来の草の根文化無償の目的に則って広く利用されていることは評価できるであろう。

以下、2018年度および2019年5月までに実施した文化遺産教育プログラムの概要をまとめる。



4. 2018年度 文化遺産教育実施カリキュラム

第1回 8月17日（金） 15時～16時半

対象：ワット・チョー中学校生徒 140名

場所：ワット・チョー中学校（シェムリアップ）

概要：スバエク・トム（大型影絵芝居）ワークショップの開催

これは、上智大学外国語学部英語学科有志による Summer Teaching Program, Cambodia STPC が課外活動として企画し、上智大学アジア人材養成研究センターが運営協力したものである。スバエク・トムはユネスコ無形文化遺産に登録されている伝統芸能で、シェムリアップで最初に立ちあげられたといわれているティーチエン一座にワークショップを依頼した。有形文化遺産である遺跡への見学だけではなく、こうしたカンボジアに残る無形文化遺産の普及教育活動も、現在のカンボジアには確実に必要であるという認識のもと、このスバエク・トムワークショップを実施した。



スバエク・トム：カンボジアの大型影絵芝居をワット・チョー中学校で実施

第2回 8月20日（月） 8時～10時半

対象：ブレイク・アンドン中学校（シェムリアップ）

生徒：8年生、9年生（中学2年生、3年生）

計100名／引率教員2名

場所：バンテアイ・クデイ遺跡

概要：8時に4台のバスに分乗した中学生たち一

行は中学校を出発し、8時20分頃バンテ

アイ・クデイ到着。王立芸術大学考古学部

および建築学部（計10名）の研修生が各

グループの案内役として生徒を引率。東門、文化遺産教育センター、仏像発掘現場、東楼

門と前柱殿などを回ってバンテアイ・クデイの歴史、ジャヤヴァルマン7世について、発

掘調査から明らかになったこと、などを説明した。視察中の王立芸術大学考古学部プリア

プ・チャンマラ教員が考古学を学ぶことの意義や現地を見ることの意味について、中学生

へ説明された。10時終了、バンテアイ・クデイを出発して10時半に中学校へ帰着。



なお実施に先立って引率する学生たちは遺跡を周って予行演習を行った。さらにその問題点などを話し合い、シェムリアップの上智大学アジア人材養成研究センターと東京のニム・ソテイーヴン氏との間でインターネット回線によるミーティングを行い、本番に備えた。

第3回 8月27日(月)

対象：上智大学主催カンボジアサービスラーニング

学生：上智大学学生8名／引率教員3名

場所：アンコール・ワット、上智大学アジア人材養成研究センター

概要：午前は王立芸術大学学生が上智大学学生へ、英語でアンコール・ワットを案内した。芸術大学学生2名と上智大学学生4名ずつのグループ、計2グループに分かれ、中央祠堂、十字型回廊、第一回廊を時間をかけて見学した。その後、全体で現在修復事業が進行中の西参道現場に向かい、三輪悟から説明を受けた。最後に、石材ストックヤードにて石工ハウトイ氏による石加工実演の見学と、体験を行った。午後は上智大学アジア人材養成研究センターへ移動し、上智大学学生がホストとなって芸術大学学生を迎えた。日本文化や芸能の紹介に続いて、ソーラン節を演舞し途中から芸術大学学生も加わった。その他、習字や浴衣などが準備され、上智大学学生と芸術大学学生たちの文化交流が行われた。



(以上文責 丸井雅子)

5. 日本人学生研修のお手伝い

現地のカンボジア人学生や日本からの研修学生に対して、センター（カンボジア本部）ではさまざまな形でお手伝いをしている。

近年日本の高等学校等では、途上国でNGOが活動する現場の視察により国際協力のあり方を学んだり、現地の人々との交流により体験学習や相互理解を目的としたスタディツアーが盛んである。カンボジア、シェムリアップにある現地センターは、現在アンコール・ワット西参道の修復をカンボジア人とともに実施しており、旅して学べる諸要件を備えていることから、座学や遺跡現場での研修要望が多い。訪問者数は年度により異なるが、多い年は500人を超える。センターでは、現地駐在の三輪はじめスタッフが対応している。

とくに、世界遺産アンコール・ワットを中心とした「カンボジア社会とアンコール遺跡」の講義

では、歴史的背景とともにカンボジア人のルーツを学べるよう、また、アンコール・ワット西参道修復工事現場での講義は、「なぜ日本のバックアップのもとにカンボジア人と協働しながら工事が進められているのか」など、日本の文化貢献を肌で感じてもらい、次世代を担う若者たちに国際協力への理解が深まることを願いながら対応している。

1. 研修訪問者（2018年2月～2019年5月）への教育対応活動

		来訪者・団体	人数	目的
2018年				
1	2.14	ANAのCSRツアー	17	ANAグループ社員によるアンコール・ボランテニアツアー（西参道修復現場・ボランテニア清掃活動他）
2	3.21	大妻嵐山高等学校	17	スタディツアー（センター講義・西参道修復現場・クデイ他）
3	3.27	NPO ふるさと南信州緑の基金（高校生）	25	スタディツアー（センター講義）
4	5.25	イオン労働連合会	27	組合メンバー研修（センター活動の講義）
5	5.29	プノンペン日本人学校（小・中学生）	10	修学旅行（センター講義・西参道修復現場・ワット・村他）
6	7.24	聖心女子学院高等部	30	スタディツアー（センター講義）
7	8.02	地球の歩き方ツアー（高校生）	10	スタディツアー（センター講義・西参道修復現場・クデイ他）
8	8.03	仙台二華高校	8	スタディツアー（センター講義・西参道修復現場他）
9	8.07	取手第一高校ツアー	9	スタディツアー（センター講義・西参道修復現場他）
10	8.10	上智大学英語学科サークル STP	24	上智大学学生サークル活動（センター講義他）
11	8.14	関西学院高校高等部	21	スタディツアー（センター講義）
12	8.17	YSP - Japan	30	スタディツアー（センター講義）
13	8.17	上智大学学生サークル・シーク	22	スタディツアー（西参道修復現場他）
14	8.17～20	新潟清心女子中学・高等学校	9	〈緑陰講座〉（センター・西参道修復現場・クデイ・博物館他）
15	8.18	取手松陽高校	11	スタディツアー（センター講義）
16	8.20	文化遺産教育（現地中学校生徒）	100	文化遺産教育（クデイ他）
17	8.22	上智大学英語学科サークル STP	23	上智大学学生サークル活動（西参道修復現場他）
18	8.26	アンコール補習授業校の遺跡見学会	16	スタディツアー（センター講義・西参道修復現場他）
19	8.27	上智大学サービスマーケティング	10	スタディツアー（センター講義・西参道修復現場他）
20	9.06	新潟大学スタディツアー	8	教養科目の授業一環（宮田春夫先生）（センター講義他）
21	12.17	カンボジア現地小学校生徒	121	環境教育（トラベアン・スヴァイ小学校）
22	12.18	仙台二華高校	6	スタディツアー（センター講義）
2019年				
23	3.01	ANAのCSRツアー	24	ANAグループ社員によるアンコール・ボランテニアツアー（西参道修復現場・ボランテニア清掃活動他）
24	3.02	上智大学メコン経済回廊ツアー	22	学生ツアー（センター講義・西参道修復現場他）
25	3.02	イオン労働連合会	22	組合メンバー研修（センター活動の講義）
26	3.04	国際青少年研修協会	40	アンコール・ワット修復事業に関する視察（青少年の育成を目的とし海外で活動する日本の団体）
27	3.06	日本大学：建築学生ツアー	6	（伊豆原月絵先生）（西参道修復現場他）
28	3.08	日本工業大学研修ツアー	10	（尾方僚先生）（センター講義他）
29	3.20	大妻嵐山中学校・高等学校	15	教養科目の授業（センター講義・西参道修復現場他）
30	3.25	NPO ふるさと南信州緑の基金（高・大学生）	28	スタディツアー（センター講義・西参道修復現場他）
31	3.26	立命館宇治中学校・高等学校	73	スタディツアー（西参道修復現場・石工デモ他）
32	5.23	プノンペン日本人学校（小・中学生）	16	修学旅行（センター講義・西参道修復現場・ワット・村他）



地球の歩き方 西参道（8月2日）



仙台二華高校 センターで発表（8月3日）



YSP-Japan センター講義（8月17日）



上智大学学生サークル・シーク 西参道（8月17日）



新潟清心女子高等学校 西参道（8月18日）



茨城県取手松陽高校 センター講義（8月18日）



上智大学 STP 西参道（8月22日）



上智大学サービ斯拉ーニング 西参道（8月27日）

6. 村へ出かけて文化遺産教育（カンボジア在住の日本人小学生へのお手伝い）

プノンペンでは、2015年4月に日本人学校が正規に開設された。初代校長は三浦信宏氏である。2015年の初回の卒業旅行時に、シェムリアップでの遺跡見学についての相談を受け、以来、上智大学の活動する西参道を含め、バンテアイ・クデイ寺院遺跡、シハヌーク・イオン博物館を案内している。

プノンペンの生徒らは多くが日系企業の駐在員の子息であり、2～3年で親の転勤に伴い各国を渡り歩く事例が多い。カンボジアのアンコールでの思い出は世界中で語られることが予想され、学びは大きい。

シェムリアップにおいても、日本人子息を持つ有志が集いアンコール補習授業校を運営している。子どもたちがシェムリアップに暮らしながらアンコール遺跡に行く機会が少ないという現状から、現地センター駐在の三輪悟が2018年より「事前学習」と「現地見学」の機会を設け、出張講義をしている。事前学習は補習授業校の校舎で行い、現地見学は、上智センター、西参道、バンテアイ・クデイ、シハヌーク・イオン博物館を訪問、説明している。

見学後には、現地日本人会主催の盆踊り大会があり、訪問の成果を発表するなど、学びに積極的に取り組む姿勢に指導の喜びがある。

また、プノンペン日本人学校から社会科副読本の掲載のためアンコール・ワットがカンボジアの象徴である理由や歴史について解説の要望があり、お手伝いをしている。



(以上文責 三輪 悟)

注

- i) 第1ゾーンを含む第2ゾーン約400km²範囲内の登録遺跡数(91)、および集落数(113)は、いずれもアプサラ機構考古学専門職Ly Vanna氏からのご教示による(Ly Vanna 2017 An Archaeology-based World Heritage Site of Angkor, p.8: 東南アジア考古学会2017年度大会講演発表資料)
- ii) アプサラ機構考古学専門職Tin Tina氏からのご教示による。
- iii) 丸井雅子2000「考古班人材養成プロジェクトのあゆみ」『アンコール遺跡の考古学』アンコール・ワットの解明1、連合出版。—2010「地域と共に生きる文化遺産—バンテアイ・クデイ現地説明会の10年—」『グローバル／ローカル 文化遺産』上智大学出版会。

